



別所憲法9条の会 たより

2025年4月 第200号

「米国を再び偉大な国にする」を掲げ、二度目のトランプ政権が始動した。製造業の国内回帰で貿易赤字を減らす。輸入車への25%関税賦課はその目玉だ。これまで200万円だった輸入車が250万円出さないと買えなくなる。米国は世界自動車販売市場として中国の28%に次ぐ19%の第二位なのだから、日本の自動車製造業への影響は大きい。

しかし、価格上昇分を負担するのは海外の自動車会社ではなく米国民である。燃費や信頼性などの理由で輸入車を選んでいた人に、ほしければ政府に50万円払え、嫌なら200万円の国産車を買えというわけだ。米国車にしても、全ての部品が米国製でない以上、値上げは必至だろう。ところがトランプ大統領、追加関税を理由に自動車価格を引き上げるなど言い出した。製造コストが大きくなるのに値段を据え置くとしたら、品質を低下させるか労働者の賃金を下げるしかない。偉大な國の一員であるためには生活が苦しくなってもかまわない、米国民はそう考えるのだろうか。

無理な政策であることがわかるのは、われわれが外からの視座で判断できるからだ。内にいると、「偉大な」などという抽象的な言葉に惑わされ、論理的思考よりも感情に流されがちになる。そもそも、LGBTQなどの多様性を否定し、環境問題に背を向け、社会を寛容から対立へと転換し、金儲け優先の国がどうして偉大なのか。

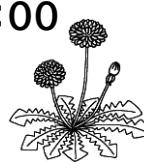
なぜここで米国事情に言及したのか。台湾有事を念頭にした沖縄離島からの避難、原発事故時の屋内退避など、冷静になって俯瞰すれば、わが国の政策も机上の空論に過ぎないことがわかる。外から見ることの大切さを忘れてはならない。

4月はDVD上映会！

日 時 4月28日(月) 13:30~16:00

会 場 長池公園自然館 会議室

参加費 300円



DVD『太平洋戦争』シリーズ10 沖縄戦、そして敗戦

総合監修 半藤一利

DVDを鑑賞後、意見交換しましょう！

3月の末浪さん講演会報告

ジャーナリストの末浪靖司さんを講師に迎え、日中関係や米中関係、そして戦争が絶えない世界情勢の中、ますます気がかりな今学びたいと思われる内容「中国事情と米中関係」と題してご講演いただきました。

Q: 日本政府はなぜ台湾有事を軍事増強の理由にするのか？

A: アメリカは世界中に軍隊を置き、日本の自衛隊をその枠組みに入れようと安保条約の時から考えてきた。政府はそれに従っている。

Q: トランプ政権の今後はどうなるか？

A: トランプは外交・戦争経験のない大統領。今後どうなるか注視する必要がある。

Q: 日本がアメリカの要求を断ればどうなるのか？

A: アメリカ無しでは日本は生きて行けないかのようにマスコミは宣伝するが、これは間違い。NATOでも今アメリカへの反発が強まっている。今後どうなるかは不透明。日本の情報源では真実が分かりにくい中、私たちは様々な情報源を探し、みんなで話し合っていく事が大切。

堀之内駅前での宣伝

4/21(月) 10:00~11:00

核兵器禁止
大軍拡、戦争への道反対
金権政治はだめ

八王子アクション

4/19(土) 10:30~
JR八王子駅北口

憲法記念日

2025憲法大集会

未来は変えられる！

戦争ではなく平和なくらし！

5/3(土・休)

東京 有明防災公園

11:00 ミニステージ開演

12:30 オープニング

13:00 メインステージ開始

スピーチ：植野妙実子さん
田中熙巳さん 古賀茂明さん

みんなで参加しましょう！

最寄り駅：ゆりかもめ有明駅
りんかい線国際展示場駅

講演動画はこちら→



質疑では

企画展 「風船爆弾作戦と本土決戦準備ー女の子たちの戦争ー」 2025年5月31日(土)まで開催

- ✓ 今から80年前の1944(昭和19)年～1945年の時期に、登戸研究所は、日本陸軍が強い期待をかけた風船爆弾の開発・製造に全力を挙げていました。陸軍は、この兵器を戦争の勝敗を決する「決戦兵器」と位置付け、アメリカ合衆国本国に大打撃を与えられるものと考えていました。
- ✓ 1発あたり数十kgの兵器積載能力しかない風船爆弾に何を搭載しようとを考えていたのか。当初は対人細菌兵器が構想されていたようです。後には米国の食糧生産に打撃を与える「牛痘ウイルス」の搭載が準備されましたが、結局は通常の爆弾・焼夷弾になりました。
- ✓ 風船爆弾は、1944年11月から1945年4月にかけて9300発が発射されました。それがどのように計画され、多数の女学生たちを動員して製造され、どのような結末になったのか、なぜ陸軍は風船爆弾に強くこだわったのかを明らかにします。
- ✓ また、風船爆弾作戦が実施された時期には、本土決戦の準備が本格的に進められていました。日本陸軍と登戸研究所は、本土決戦に際してどのような戦いをしようとしていたのか、本土における遊撃戦(ゲリラ戦)はどのように構想されていたのか、また、敗戦に際しての証拠隠滅の指示など、残された資料から詳細に検証します。

[登戸研究所資料館WEBサイト](#)より



気球の直径は約10m、和紙製、総重量は200kg。兵装は15kg爆弾1発と5kg焼夷弾2発。約9300発の放球の内、アメリカ本土に到達したのは1000発前後と推定され、アメリカの記録では285発とされている。オレゴン州ではピクニック中の民間人6名が死亡した。

アメリカ国民は、軍事施設への散発的な攻撃よりも森林火災に心理的パニックを起こすため、これを利用した後方攪乱という意味合いがあった。そのため、担当したのは参謀本部第二部第8課という情報や通信傍受、諜報に関わる部署であった。アメリカ政府は日本側が戦果を確認できないように官民に厳重な報道管制を敷き、風船爆弾による被害を隠蔽した。(WIKIPEDIAより)

*5月23日(金)、登戸研究所資料館の見学会を開催します！

映像鑑賞 → ガイド付き展示見学 → 史跡見学(明治大学キャンパス内)

参加ご希望の方は下記のホームページ問合せ欄、またはメールにてご連絡ください。

- 展示室
- 風船爆弾や電波兵器など、物理学を利用した兵器の開発をおこなっていた第一科
 - 化学を応用した生物化学兵器やスパイ用品などを開発していた第二科
 - 中国大陸で展開された経済謀略活動のために偽札を製造していた第三科
 - 本土決戦体制下の登戸研究所と所員の戦後などについて

[風船爆弾の企画展](#)

[登戸研究所資料館の場所](#) (明治大学生田キャンパス)

小田急線生田駅南口より徒歩10分(または向ヶ丘遊園駅よりバス) 水曜～土曜開館

メールは→



別所憲法9条の会ホームページ ➤ <https://bessho9.info/>

